

奪われた名前と本来の自分

『ハンドメイド・テイル／侍女の物語』における侍女の名前

市田 若菜*・住田 光子**

(令和7年10月31日受付)

The Stolen Name and Genuine Self:
The Name of the Handmaid in *The Handmaid's Tale*

Wakana ICHIDA and Mitsuko SUMIDA

(Received October 31, 2025)

Abstract

This paper examines how women use different names such as the occupational name and the authentic name in the patriarchal society, Gilead in the online drama, *The Handmaid's Tale*. With regard to the original novel, *The Handmaid's Tale*, a critic says that handmaids are called by the occupational names to protect self and avoid danger. Compared to it, the handmaids seem to use the occupational names not only to conform to the oppressive nation but also to retain the individual identity as a mother or colleague, in the television adaptation. The purpose of this study is to analyze how the transition between the occupational name and the real names affects formation of human identity and to clarify female resistance to the national suppression by Gilead. By doing so, we are focused on unique way of female self-identification in the despotic nation by which genuine female names are stolen.

Key Words: name, handmaid, suppression, identity, *The Handmaid's Tale*, women's rights

はじめに

本稿では、侍女の「名前」に着目し、抑圧的な社会で生きる女性が、社会的役割と自己のアイデンティティの問題を抱えながらどのように自らを守るのかについて、ネット配信ドラマ『ハンドメイド・テイル／侍女の物語 (*The Handmaid's Tale*)』を通して考察する。¹カナダのマーガレット・アトウッド (Margaret Atwood 1939-) の小説『侍女の物語 (原題: *The Handmaid's Tale*)』(2001) では、ギレアド (Gilead) という国家が舞台となっている。²批評では、この小説は、1985年に発表された当時は、「近未来の恐怖政治を描いたダークファンタジー」としての見方が

主流であったが、ドナルド・トランプ (Donald John Trump 1946-) 政権下を経て、アメリカ社会に対する不安と抵抗のシンボルへと変容していったことが指摘される (鴻巣 pp. 5-6)。³

この小説の映像ドラマ版において、実際は絶対悪としての人物は登場しないことが指摘されている (稲垣)。⁴つまりアトウッドの作品は、個人の糾弾というよりも、抑圧された社会における女性たちの権利を掘り下げている作品に見える。その一方で、小説では、侍女たちは職業上の名前を使用することで、自己を守りリスクを回避していることが指摘される。あえて不明確な名前を使うことで、侍女たちは物語の中での存在を証明しつつも、外部の危険から距

* 広島工業大学情報学部情報コミュニケーション学科学部生

** 広島工業大学情報学部情報システム学科

離を置くことが可能になると言われている（日中 p. 12）。⁵ 侍女の肩書としての「名前」は、神のために身を捧げる「（ギレアドにとって）尊い行い」をする人間であること示すもので、侍女の「本名」は日常生活では明らかにされない。しかしながら、多くの侍女は自ら望んで「侍女」になったのではない。実際は、女性たちは「侍女」としての仕事を受け入れておらず、その仕事に誇りを持っていない。

本稿では、映像ドラマを通して、抑圧的な状況下で暮らす侍女たちに着目する。アトウッド作品における職業上の名前と本当の名前との使い分けが女性たちに与える意味を考察する。さらに、監視社会における女性たちの心情を明らかにし、ギレアドの社会では名前の使用にどのような差異があるのかについて再考する。そうした過程を通して、女性たちが不安定な環境の中で、自身の尊厳を守り、生き抜くこととは何か、考察を深めていきたい。

1 『ハンドメイド・テイル』の世界

取り上げる作品は、『ハンドメイド・テイル／侍女の物語』である。この映像ドラマは、2017年4月26日に動画配信サービス「Hulu」にて配信が開始された。原作はマーガレット・アトウッドの小説『侍女の物語』で、主演はエリザベス・モス（Elisabeth Moss）（ジューン・オズボーン役）である。⁶ 『ハンドメイド・テイル／侍女の物語』は、現代社会を舞台にしながらも、何年も子供が生まれない地域が存在するなど、現代よりも深刻な少子化問題が描かれている。この問題を解決するため、個人主義的な価値観を持つ「アメリカ」に対してクーデターが起き、ギレアドが建国された。ギレアドでは、女性たちは厳格な階級制度のもとで、男性たちに管理され、深い抑圧を受けながら生きている。

主人公のジューン・オズボーン（June Osborne）は、子供を産むために司令官（支配者階級一家の主人）に仕える「侍女」として過酷な生活を強いられる。本ドラマでは、ジューンが、娘ハンナ（Hanna）の奪還と、女性としての自由を求めて生きる姿を描いている。

このドラマにおける‘handmaid’（侍女）とは、代理出産を行うために司令官とその司令官の不妊の妻に仕える女性を示している。Oxford English Dictionary の定義によると、‘handmaid’とは、「個人的な女性付添人、または召使（‘A female personal attendant or servant’）」を意味する（‘handmaid,’ def.1）。⁷ 一般的に、侍女とは、「高貴の人の側に仕える女性。」のことを意味する（「広辞苑」）。⁸ 一般的な侍女は身分の高い者に仕え、主人の髪や服装を整えるなどの身の回りの世話をし、掃除などの雑用をこなす役割を担うものとして解釈される。⁹ それに比べ、本作品の侍女に求められるのは、司令官とその妻の身の回りの世話や雑用だけではない。「儀式」によって妊娠した子供を産み、乳

離れまでその子供を育てるという役割がある。侍女は、社会のなかで生殖・出産の重要な部分を担っている。侍女という職業は、ギレアドにおいて国家に背き、神の教えに従わなかった人物が務める職業とされている。

ギレアドの社会にはいくつかの問題点がある。最も重大なのは、社会のなかで規律を守って生きる人々の心理を蔑ろにしている点である。本作では、環境汚染（工業活動による水質や空気の汚染）と女性の不妊の増加の影響で出生率が低下し、その結果、1年の間に子供が一人も誕生しない地域もある。この問題に対処するため、ギレアドは全体主義に基づき、現代の個人主義的な生活様式を否定する。かつて少子化や環境問題がなかった時代の生活様式に回帰し、家父長主義のもとで、個々のメンバーが国家に奉仕する社会の実現を目指す。

そのような生活様式の変化は、揃いの手縫いの服、オーガニック素材を使用した食事、古いつくりの家と家具から感じるができる。車を所有できるのは仕事等で必要な人のみで、車通りも少ない。娯楽として、女性は編み物、友人宅への訪問、散歩、庭いじりなどを行う。男性は、読書、ゴルフなどを行う。これらのことから分かるように、ギレアドの生活はテクノロジーや工業製品を必要としないもので構成されている。見たところ、ギレアド社会は環境に優しいように配慮されている。また、子供に対する教育制度や医療制度は整備され、出産や子育てに対する理解や協力も得られやすい。

しかしながら、このような国家の根底にあるのは、情報リテラシーが統制された生活様式のもと、環境破壊と少子化を止めるために出産や子育て支援を国家単位で行うというやや行きすぎた見方である。さらに、ギレアドの社会は、規則に従わない国民に対し、軍事力を行使し手足の切断や死刑などの厳罰を科す。このように、ギレアドの国家としての在り方には問題がある。その証拠に、ギレアドからの他国への亡命者が多く、それだけでなくギレアド国民の行方不明者や死者も頻繁に見られる。つまり、たとえ厳しい規則が理想国家の実現のための施策だとしても、そこに生きる人々の基本的人権の尊重がなされていない。それこそが、ギレアドの社会の問題点であると言える。

批評では、本小説は、2017年から2021年のトランプ政権下の「アメリカ」の特徴を正確に描写した作品として評価されている（Atkins p. 118）。¹⁰ 2017年6月27日、アメリカでは、女性の権利について抗議活動を行う活動家の女性たちが、作中の侍女と同じ赤色のワンピースとフードを纏い、白いボンネットを被り抗議活動を行った。彼女たちは、作中の侍女のしぐさも模倣していた。¹¹

本ドラマ作品が、社会に与えた影響は様々なところに見られる。活動家たちは、子供の中絶をめぐる議論など、ト

ランプ政権が推進した、家父長制的な価値観に対して抗議している。例えば、2021年5月29日に抗議活動が起きた。テキサス州オースティン（Austin）で行われた集会では、人々は「テキサス人の中絶に手を出すな（‘Keep Your Hands off Texans’ Abortions’）」という主張のもとに集結した。¹² 当時、活動団体「テキサス・ハンドメイド（Texas Handmaids）」のFacebookのイベント・ページに掲載された、侍女の衣装を着てデモに参加するイベントには、5,000人以上の人々が情報を閲覧し、「興味あり」または「参加予定」とのタグ付けを行った。¹³ また、この日のFacebookには、ある動画が投稿された。そこには、ギレアドの侍女と同じ服装の女性たちが列をなしてプラカードを掲げている様子が映っている。ドラマ作品の「侍女」と同じ服装、同じ仕草で抗議活動をすることで、理想実現のために、多数の人間が犠牲になり得るという未来の可能性を伝えている。つまり、ギレアドの女性たちが直面する悲惨な状況を喚起させることで、現代アメリカ社会に対して警鐘を鳴らしている。それだけでなく、オースティンの抗議活動では一般的な抗議運動と異なる手段を用いるため、SNS上においても注目度が高い。活動家たちは、ドラマ作品の持つ特別な意味を踏まえ、それらを実生活に取り入れて抗議活動を展開させたのだらうと考えられる。

その一方で、本ドラマでは、作品の世界観や女性の権利だけでなく、登場人物の魅力も高く評価されている。本作は「ダークな世界を『生き抜く』希望を書いた傑作」と評された（中谷）。¹⁴ なかでも、ジューン（侍女名：オブフレッド）役を演じた、エリザベス・モスは印象深い。女優としての深みのあるエリザベスの演技は称賛に値する。エリザベスは、本作を「悲惨な場面ばかりが連続するだけの作品ではなく、見るものに希望をもたらす作品」として解釈している（中谷）。現実離れした設定の中に生きる登場人物の思考や感情に、視聴者が親近感を抱けるようなエリザベスの演技が、本作の魅力のひとつである。

本ドラマでは、いわゆる、生まれながらの悪人が登場することはなく（稲垣）、¹⁵ 苦しむ女性に手を差し伸べる善人の存在がある。つまり、人間に対して、意図的に危害を加える人間は極稀である。多くの視聴者は物語に希望を求めている。そうした点に鑑みると、アトウッドのドラマは「過酷な状況」や「理不尽」、「絶望」だけを伝えるのではない。その根底には、純粋な「希望」がある。それゆえ、女性たちが過酷な世界を強く生きる、という物語に共感する視聴者も多い。ドラマは、社会の日向を描く一方で、諷刺的手法で、その陰で苦しむ人々がいることを提示している。

2 社会と個人

ギレアドでは、法によって国民の自由が制限されている。

ギレアドには現代の民主主義国家にはない様々な規制が存在する。なかでも、女性に対する抑圧が顕著であると言える。

規制	具体例
女性の抑圧	読み書きと社会参加の禁止 職業選択の自由がない。
自由恋愛・結婚の禁止	妻は、男性への報償として与えられる。同性愛の禁止。
反逆行為への厳罰	法を犯すと処刑される、または強制労働が課される。
信仰・言論への規制	ギレアドが認める宗教以外は、信仰に対する弾圧が行われる。
移動の制限	検問所にて身分証明の提示を求められる。 公共交通機関に武装兵がいる。
子供との暮らしに対する制限	国家が実親に無許可で養子縁組を行う。 実親が罪を犯した場合は、子供と会えない。

図1 ギレアドにおける個人の自由の制限

規制を破った場合には、処刑や身分のはく奪、コロニー（強制労働施設）¹⁶での労働が課される。図2は、国家における階級と身分、その役割を示している。

階級・身分	役割
★司令官 （支配者階級）	国家運営のため、軍事、政治などを司る仕事をする。
司令官の妻 （支配者階級）	家の女主人として、侍女やマルタを統括する。 家と邸宅の管理責任者。 不妊でない場合は、子供を産む。 子供を育てる。
おば （支配者階級）	「おば」は、侍女を教育・監督する職種である。
侍女 （非支配階級）	ギレアドの思想に背いた女性である。 司令官の不妊の妻の代わりに司令官の子供を妊娠し出産する。
女中 （非支配階級）	ギレアドの思想に背いた女性である。 司令官の家の家事全般を担う。また、公共施設の維持管理を行い、工場などで労働をする。
★守護者・兵士 （軍人）	テロリストの粛清、司令官宅や街中の警備を行う。
便利者 （平民階級）	農業などの生産活動に従事する。 教会に行き、ギレアドの教えを学び、順守する。

図2 ギレアドにおける階級・身分とその役割
（★が付いているのは男性の役職）

図2からは、ギレアドにおける階級制度は現代の民主主

義の国家とかけ離れていることが窺える。男性は、司令官・守護者・兵士・便利者として生産活動に従事できる。それに対して、女性が就くことができる職業は侍女・おば・女中などである。建国当初、教義に背いた行為を行った女性たちは、侍女や女中として仕えることを余儀なくされた。国内で問題を起こし刑罰の対象となった女性も、妊娠や出産が可能な場合には、侍女としての役割を課されることがあった。一般的に、侍女・女中は、司令官宅に住み込みで業務にあたる。だが、彼女・女中には給与が支給されず休暇も与えられない。ギレアドの女性は子供を産み、育てることが役割とされるが、「侍女」は育児だけでなく代理で出産を行う職務を担う。このような社会の仕組みからは、男尊女卑の風潮が強いことが伺える。

侍女はセンターで教育を受けた後、司令官宅に配属されその職務を果たす。侍女の重要な職務のひとつに、司令官とその不妊の妻に仕え、妻の代わりに妊娠・出産を行うことがある。一方、司令官の妻は「儀式」を執り行うという重要な責務を担う。「儀式」とは、侍女が、司令官の妻の足間に頭を乗せた状態で、司令官と侍女とが性行為を行うことを指す。「儀式」は、侍女の受胎可能日（排卵日）に合わせて行われる。「儀式」の前、司令官は、旧約聖書における「創世記」の1節を朗読する。侍女制度の考え方は、この「創世記」の教義に基づいている。¹⁷ そこには、ヤコブ（ジェイコブ:Jacob）と、不妊の妻ラケル（レイチェル:Raehel）の物語が記されている。ラケルは子を授けられないことに苦しみ、自身の侍女ビルハ（ビルハ: Bilhah）をヤコブに差し出す。ヤコブがビルハと性行為を行い、ビルハがラケルの「上で」子を産むことで、ラケルもまた子を授かったとされる（「創世記」30章1-6節）。「創世記」におけるこれらの記述を踏まえ、ギレアドでは出産に関する特異で独自の風習が根付いている。括弧（ ）内の表記は、作中の呼び方による。



図3 出産の儀式で使用される椅子

侍女が司令官の子供を出産する際、図3のような「特殊な椅子」に座って行われる。この椅子には上下に二つの座面があり、司令官の妻（緑）と侍女（赤）が同時に座ることができる構造となっている。椅子の上段には司令官の妻が、下段には侍女が座り、出産に臨む。「創世記」30章の1節と同様に、司令官の妻は「侍女」を司令官に差し出し、妊娠・出産を行わせる。つまり、司令官の妻は実際の妊娠・出産は行っていない。だが、ヤケルの侍女のビルハのように、ドラマでは、他の女性（侍女）の身体―すなわち子宮を通じて、性行為と出産が行われるという形が描かれている（シーズン1エピソード2「出産の日」）。こうした背景から、生殖としての「儀式」や出産が、身体の中でも、「妻」の子宮に近い場所で行われる必要がある。そのような事情から生まれたのが、「特殊な椅子」である。つまり、椅子の2層構造は、侍女と司令官の妻の関係性を反映させた構造となっている。

出産後、侍女は司令官の家で一定期間暮らす。赤子の乳離れ後には、司令官の妻・おば・侍女の三者によって、子供と侍女の縁を切る「儀式」が執り行われる。儀式終了後、侍女は次の任地またはセンターへ移動し、それ以降、侍女と子供との交流はない。

興味深いことに、国家建国の構想段階で、ギレアドの「侍女制度」を提唱した女性がいる。それは、セリーナ・ジョイ・ウォーターフォードである。セリーナは、司令官フレッド・ウォーターフォードの妻である。セリーナは、ギレアド建国前、保守活動家として、ギレアドの思想を広めるための講演活動や著書『女の領域』を手掛けた。ギレアド建国後は、家庭に入り、セリーナの侍女ジューンが産んだ「ニコール」と、自身が妊娠した第2子「ノア」、二人の子供に恵まれた。だが、セリーナはのちに国外逃亡をする。

セリーナの過去に遡る。フレッドと恋人同士であった頃である。学生のセリーナは、ギレアドの社会システムを設計していく段階で、「女性の生殖能力を財産として捉え、女性は妊娠・出産・子育てに専念できるように家庭に入ることが、出生率低下の対策として有効なのではないか」とフレッドに進言した。フレッドは、その意見をもとに「侍女」という女性を念頭に置いた社会制度を考案し、ギレアドの社会の礎とした。一方セリーナは、第1子ニコールとの暮らしの中で、母性に目覚め、子供により良い人生を授けたいと思うようになる。そこで、セリーナは女子教育改革を議会に願い出るが、その提言は棄却される。この行き過ぎた行動がもとで、国家によって処罰を受けることになる。一連の事件からセリーナは、ギレアドでは、現行の女子教育制度のもとでは、人生選択の自由がないことを悟る。

セリーナが第2子を妊娠していた時期、彼女と夫フレッドはカナダ政府により身柄を拘束された。その後、カナダ

に亡命した元侍女たちを率いたジューンによって、フレッドは殺害された。フレッドの殺害は、ジューンにとっては、個人的な復讐である。だが、ほかの元侍女たちにとっては意味合いが異なる。ギレアドという国家への抵抗であり、女性を抑圧する男性-司令官に対する激しい怒りによる。

こうした経緯を経て、セリーナは隣国カナダに居住する司令官夫妻のもとに匿われることとなった。しかし、セリーナはその司令官の妻との関係性に葛藤を抱えつつ、自身と胎児が引き離される可能性に対する強い不安を抱くようになる。その結果、セリーナはカナダ政府に対して政治的亡命を申請するに至った。女性が家庭に入り、出産と育児に専念するというセリーナの案は、ギレアドの社会システムの礎として導入された。だが、セリーナは、ギレアドの社会構造の欠陥に気付く。それが、家父長制に基づいた侍女制度である。セリーナは一度改革を試みるが失敗し、最終的に政治的な亡命を選ばざるを得なかった。この状況からは、当初、建国構想の要になった女性の進言は受け入れられず、ギレアド社会に男尊女卑が浸透していることが窺える。女性が生きづらい深刻な状況がある。

3 ドラマにおける名前の役割

3-1 ふたつの名前

『ハンドメイド・テイル／侍女の物語』において、「侍女」はフレッド家の侍女であるジューンが「オブフレッド (Offred)」と呼ばれていたように、配属先によって「侍女」の名前が変化する。

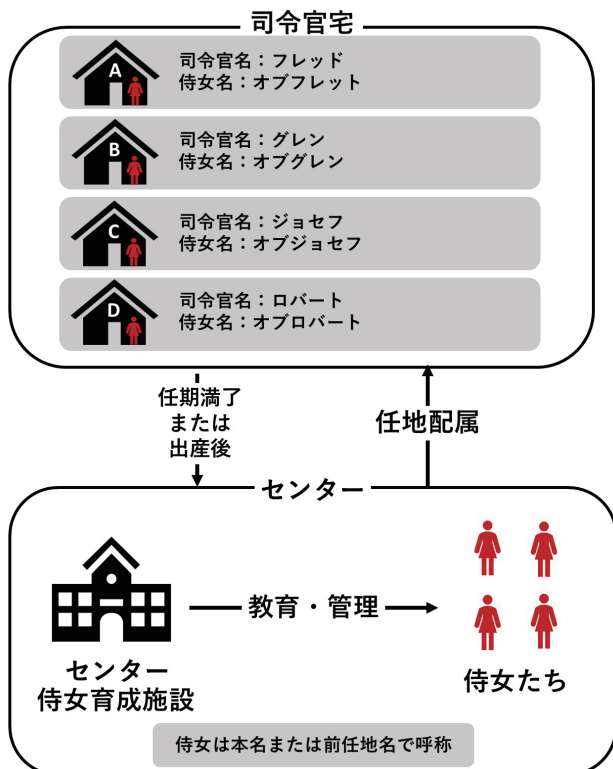


図4 侍女の名前の付け方

赤色は侍女を表す。グレーの枠内では、侍女の名前の呼ばれ方について述べている。この図4が示すように、侍女の「名前 (肩書)」には、英語で「所有する状態」を意味する「オブ (of)」をつけ、仕えている司令官の名前を入れる。侍女は、日常生活においても、職業上の肩書としての呼び名を常に使用する。そのため、同じ地区で暮らしている侍女同士も互いの「本名」を知らないことが多い。このことは、侍女たちが親睦を深める上での壁である。また、侍女がギレアドの規則に反して粛清された場合、その身元が分からないケースが多い。それだけでなく、一人の侍女が消息不明または死亡した場合には、直ちに新しい侍女が配属され、同じ「名前 (肩書)」で任務にあたる。その点で、侍女は、他の人間と代替可能な存在である。『ハンドメイド・テイル／侍女の物語』において、名前にはいくつかの役割があると考えられる。『ブリタニカ国際大百科事典』によると、一般的に、名前とは、「現実もしくは想像上の事物をほかの事物と区別して指示し、言及するときに使われる言葉」である。また、「人間の社会におけるおよそすべての物や事柄に名前がある。向かい合う人や事物に、それ相応の呼称を付ける。その中で人間は現実の生活に必要な記憶を作り上げ、あるいは対象に対して積極的に働きかける操作的な思考を生み出し、また、他者とのコミュニケーションを行っている。それゆえに名前は人類の文化に固有の歴史性、社会性の基礎である」と言われる (ブリタニカ)¹⁸。つまり、名前には呼び名としての側面があるだけでなく、名前とは、人間が生活する上で欠かせない認識・思考の礎となっている。

ギレアドでは、加速する少子化を防ぐことが重要な責務として存在する。そのなかで、「侍女」という、出産可能な女性は、稀少な存在として描かれている。そのため、どの家族の所属であるかを示す「名前 (肩書)」を使うことは、管理を容易にするために有用である。また、本名を使わないことで、侍女が「侍女」として国家や配属された家に仕えるという意識を強めることができる。侍女に日常生活で「名前 (肩書)」を使用させることは、国家によって支配されていることを意味する。つまり、侍女同士の親交や交流は推奨されない。侍女たちが新たな人間関係を築こうとする際、相手の本名や素性が分からないため、常に不信任感が付きまとう。

本ドラマで興味深いのは、本名ではない名前を使うひとつの良い側面として、「名前 (肩書)」で呼ばれることで、新たに絆が結ばれるということが示唆されていることだ。ドラマのなかで、前任のオブフレッドが侍女ジューンの自室で首つり自殺をしていたことが判明する。(シーズン1 エピソード4「メッセージ」)。自殺の理由は明言されていないが、フレッドが関係しているのではと匂わせる場面が複数ある。その伏線から、フレッドと前任のオブフレッド

との間の不倫関係セリーナに発覚し、その結果、侍女はセリーナによって精神的に追い詰められ、自殺に至ったと視聴者は推測することができる。(シーズン1エピソード8「イゼベルの店」)ある時、ジューンは、セリーナとのトラブルが原因で、侍女の自室に監禁される。ジューンは、精神的・肉体的に追い詰められるが、クローゼットの隅に、ラテン語で書かれた「奴らに虐げられるな(‘Nolite te Bastardes Carborundorum’)」というメッセージを発見する。このシーンは特に象徴的で、この言葉はジューンの心に深く刻まれる言葉になる。別のドラマ回では、そのメッセージの下に、ジューンが一人で、英語で「あなたは一人ではない(‘You are not alone’)」と書き足す映像が映る(シーズン1第8話「イゼベルの店」)。

この残されたメッセージには、「前任の侍女(オブフレッド)」が関わっている。つまり、ジューンの前に、ウォーターフォード家に配置された侍女である。この侍女が登場するのは、彼女の首つり自殺の遺体が、ウォーターフォード家の女中に発見される場面のみである。この映像だけでは、前任者の侍女のその人となりを知ることはできない。それでも、前任者の侍女が残したラテン語の「やつらに虐げられるな」と残されたメッセージは、のちに、ウォーターフォード家の侍女として同じ境遇にあるジューンの心を揺さぶるような威力を有する。ジューンは、次のオブフレッドのために「あなたは一人じゃない」というメッセージを残した。前任者の侍女は、自身と同じ名前を名乗る次の侍女との見えない繋がりを利用し、次の侍女が自身と同じような深刻な問題に直面することを予期し、文字を通して次の侍女に向けて警告を残した。つまり、オブフレッドという「名前(肩書)」があることで、前任者の侍女とジューンは時間を超えて、同じような環境にある悩みを共有する。それによって、前任者の侍女とジューンはある種の「繋がり」を得たと考えられる。

さて、別の「名前」の例を考えてみたい。前述のように、同じ「名前(肩書)」が人と人をつなぐこともあれば、同一人物が違う名前と呼ばれ、葛藤することもある。モイラは「イゼベルの店」に「ルビー」という「名前(肩書)」で勤務している。モイラは、侍女としてセンターで教育を受けていたが、その教育期間中にジューンとともに亡命を図った過去がある。彼女の亡命は失敗に終わり、モイラは、侍女教育係のおばによって、侍女に悪影響を与える人物であると見做された。そのため、モイラは、亡命の罰として「イゼベルの店」での勤務を余儀なくされた。「イゼベルの店」とは、娼婦が司令官に性的サービスを提供する施設を示す。それは、司令官の妻にとって通行禁止の地区にあたる。そこでは、ギレアド社会に馴染むことができなかったアメリカの学者や記者などが、娼婦として働いている。

ジューンとモイラはギレアド建国前からの友人だった。モイラは、ジューンとジューンの夫ルークが知り合うきっかけを作った人物であり、夫妻の子供「ハンナ」の代母¹⁹である。モイラは、ギレアド建国前、子供のできないカップルのためにビジネスとして代理出産を行った。一方、ジューンは、自身の出産経験を活かし、初めて出産を行うモイラの心と体のケアを行った。それだけでなく、ジューンとモイラは、政治思想が強く、アメリカ政権崩壊からギレアド政権へ移行する混乱期、反ギレアドのデモに参加し精力的に政治活動を行っていた。(シーズン1エピソード8「イゼベルの店」)

やがてモイラは、ギレアドからの亡命を成功させる。モイラは、カナダの行政自治区リトルアメリカでの新しい生活に適応し、ギレアド亡命者支援の仕事に従事する。その矢先、ウォーターフォード司令官が使節団の一員としてカナダを訪れることになる。モイラは、司令官来訪に対する「反ギレアドのデモ集会」に参加する。抗議が過熱する中、参加者たちはギレアドを批判するプラカードや自身の名前が書かれたプラカードを掲げていた。モイラは「私の名前はモイラ(‘My name is MOIRA’)」というプラカードを掲げる。それだけでなく、モイラは、ウォーターフォード司令官とセリーナが乗る車の窓を叩いて注目を引き、その内容を夫妻が見るように仕向け、「ルビーじゃない。クソ野郎」と侮辱する(シーズン2エピソード19「スマート・パワー」)。

この場面について、「名前(本名)」を使わず、「名前(肩書)」を使用することは、その人のアイデンティティ喪失を意味する。ギレアドではそういったことが頻繁に起きている。それに対して、女性が、ギレアド国外で本名を名乗った場合は、女性がギレアドの支配から逃れ、自由な人生を選択したことが明らかになる。

こうした経緯からは、モイラにとって、「ルビー」という名前は、ギレアド側によって自由を奪取された過去を示す。モイラは、ギレアド国外では「名前(本名)」を名乗るのが自然であり、それこそが真にあるべき姿だと考えるようになる。このドラマは、政治的亡命者としてのモイラの存在を通して、「ギレアド」が、人間としての尊厳を奪う、専制政治の国家であることを視聴者に印象づけている。また、デモ集会において、ウォーターフォード司令官に対して、「ルビー」という名前のプラカードを掲げる行動には深い意味が込められている。それは、かつての女性、娼婦、「ルビー」であることを男性、司令官に思い起こさせ、「尊重されるべき一人の人間である」ことを認識させる。侍女のように2つの名前を持つモイラのこの行動から、侍女の「名前」は、単なる職業における役割を示すだけでなく、一人の人間の中にある過去と未来、異なる立場の自分を象

徴している。

3-2 名前と自分らしさ

これまで名前について考えてきたが、名前と関係の深い「言葉」について考えたい。一般的に、もの（概念や対象物）があり、それに名前を付ける（指し示す）ことで、記号としての「言葉」が作られると考えられている（武田 pp. 118-20）。²⁰ 一方、ソシュールは、その著作『一般言語学講座』において、上記とは異なる見解を示している。ソシュールの考えは、一人の人間が有する複数の名前の存在を考える上で、ヒントを与えてくれる。それは、「言葉はもの（概念）の名前ではなく、言葉はネガティブな差異のシステムである」（ソシュール pp. 160-165）²¹ とする捉え方である。

ソシュールによれば、英語の「羊（sheep）」とフランス語の「羊（mouton）」の語義は同じであるにもかかわらず、羊という言葉が指し示す意味範囲の差異がある。例えば、英語において、生きている羊は「sheep」であるのに対して、食卓に出された成長した羊の肉のことを「mutton」、一歳以下の子羊、または子羊の肉の場合には「lamb」と言う。一方、フランス語の羊「mouton」は、生きている羊も食卓に出された羊肉もその年齢に区別なく同じ言葉で示される。このことから、「sheep」（英語）と「mouton」（仏語）には、言葉が指し示す意味内容の差異があることが分かる。



図4 フランス語と英語の意味範囲の違い
（ソシュールの『一般言語学講義』から図解）

ソシュールによると、「もし言葉があらかじめ与えられた概念を受けもったものであるならば、それらはいずれも意味上精密に対応するものを、言語ごとに持つはずである」と言う。その場合、言語による差異は起こらない。すなわち、言葉の概念は、それが実定的に含む内容によってではなく、他の物事との関係性によって変化することが分かる（ソシュール p. 163）。²² ソシュールの考え方に従うと、「言葉」や「名前」は、前もって与えられた観念ではなく、その個々の言葉が指し示す範囲や価値において、それぞれ違いがある。

前述の「モイラ」と「ルビー」という、一人の人間に与えられたふたつの名前を考える上で、この点は示唆に富んでいる。ギレアドの物語では環境要素が名前の差異に関わっている。

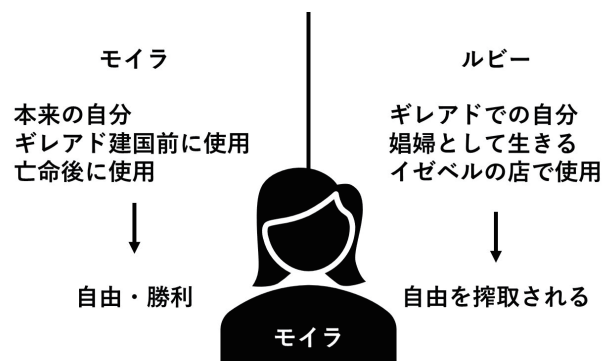


図5 名前の違いによる認識の違い

図5のように、「モイラ」も「ルビー」も同じ人物を指し示す言葉（名前）である。だが、それぞれの名前が使用される状況が異なる。それは、英語では「羊」を指す言葉が複数あることと類似している。「ルビー」は、「イゼベルの店」で働くにあたり使用された名前であり、「モイラ」は、ギレアドから亡命し「イゼベルの店」での職務から解放された後、名乗ることができた「本来の名前」である。モイラは、「ルビー」を名乗る時には、ギレアドでの生活を受け入れているが、「モイラ」を名乗る時はそれを拒んでいる。「モイラ」は、亡命し、ギレアドへの抗議活動を行うなど、以前よりも自らの意思に忠実である。

モイラは、同じ境遇を持つ亡命女性との会話で、「（ギレアド）にいたら（侍女は）後遺症が残る」と述べた。モイラは、ギレアドから逃げるために取った行動を恥じている。元侍女のエミリーに対して、モイラは、「生き残るためにしたことだよ。逃げるために。でも今は自由。勝ったんだよ。連中におっ壊されなかった」言い、エミリーを慰める（シーズン4エピソード7「家」）。このやり取りから、一人の人物が、抑圧された「ルビー」と自由な「モイラ」という相反する二つの側面を持つ理由が明らかになる。自由を奪われた状況下で、自らの望みに反する行動を取ることには、ギレアドで生き延び、その場所を脱出するための手段であったと女性たちは自らの行動を正当化している。

これとは対照的に、侍女が産んだ子供に独自の「名前」を与える場面も、ドラマには描かれている。侍女によって出産された子供は、すぐに配属先の「家（家族）」の子供として扱われるため、侍女自身が名づける権利は与えられていない。一般的に、侍女は、子供が乳離れするまでの時間を共に過ごすことができるが、その後は子供と離される。

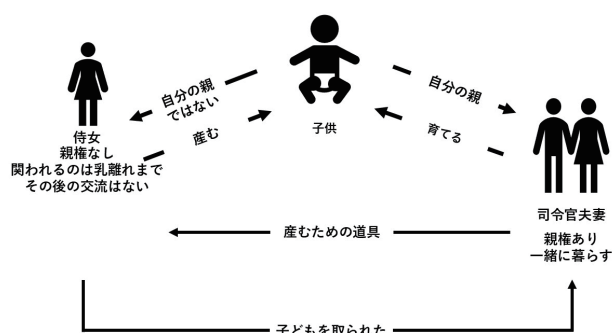


図6 子供をめぐる侍女と司令官夫妻の関係

図6のように、子供は侍女が生んだ子供であるが、周囲の人々からは、「侍女」本人の子供として扱われていないことが分かる。これは、階層制度に基づくため、仕方のないことだが、侍女のなかには、司令官夫妻に子供を奪われたと負い目を感じる者もある。基本的に、子供の名づけは、「親」である司令官夫妻が行う。だが、ドラマには、侍女が子供に別の名前を付けているという場面が見られる。これは例外的である。

その例は、女兒を出産した侍女の「ジャンーン」である(シーズン1エピソード2「出産の日」)。司令官の妻は女兒に「アンジェラ」と名付けるが、ジャンーンはその女兒を密かに「シャーロット」と呼んで世話をしていた。(シーズン1エピソード3「期待」)一方、ジューンは、女兒を出産した際、ウォーターフォード夫人(セリーナ)が付けた「ニコール」という名前とは別に、「ホリー」(Holly)という名前を女兒に与えていた。ホリーという名前は、ジューンの母親の名前に由来している。(シーズン2エピソード21「ホリー」)

侍女は、産んだ子供とやがては離れる運命である。だが、腹を痛めて産んだわが子を奪われることはつらく、悲しいことである。そのため、多くの侍女は、乳離れまでのわずかな時間だけでも、自身がつけた名前でも子供を呼び、親子としての繋がりを深めておきたいと願う。そのせめてもの抵抗の証が、侍女が子供に付ける「名前」であろう。侍女は、司令官とその妻が付けた「名前」でその子供を呼ぶならば、否が応でも「侍女と司令官の子供」という関係性や、侍女としての地位の低さを意識せざるを得ない。そこで、独自に付けた「名前」で他者を呼ぶ。これによって侍女にとっての真の「母と子供」の関係が構築される。このように独自の名前を付けることが、ある人と他者との関係性を再定義することに繋がっている。映像ドラマからは、「名前」を通して、歪んだ社会構造の下で、人がいかに自身のアイデンティティを失わないように奔走するかを視聴者は知ることができる。

本ドラマにおいて、名前とは、個人を定義する重要な要素である。もの(概念や対象物)があり、それに名前を付

けることで記号としての言葉が作られると言われている。それに対してソシユールの理論において、同じものを指す複数の言葉があった。元々同じものを指し示していても、それぞれの言葉によって意味の広がりやの差異があった。差異は、言葉と他の項(言葉)の関係によって生じていた。

本ドラマにおいて、同じ女性(侍女)につけられている名前は、ふたつある。「名前(本名)」と「名前(肩書)」である。一人の人間を指し示す「名前」が2種類ある。前者は、そのひとが産まれた時に与えられた名前であり、後者は、職業上そのひとに与えられた名前である。ギレアドという社会が特殊なのは、そこでは、一方の「名前(肩書)」だけが、その人間を表す唯一の「名前」として通用していく点である。ギレアドでは、女性は家父長的な階層制度の下で、出産と子育て、自立において、制限がある。そうした女性の制約を顕著に示すのが、「名前(肩書)」であろう。侍女は、働くために侍女としての「名前(肩書)」を付けられることで、もの(所属物)として管理され、労働に従事することになっている。つまり、ふたつの名前は同じ人間を表しているが、一方の名前は、「国家への奉仕」と「家への帰属」を表すという観点で、異なる存在の人間を表す。「名前(肩書)」の存在によって、人間を人間として扱うというよりも、人間をものとして扱う側面が強い。環境要素が、名前の存在意義を決定する。人間には、労働に従事している以外の時間があるはずだが、ギレアドの侍女は、「名前(本名)」の下で、自由な人生の選択は認められていない。

一方の「名前(本名)」を奪われることは、ことさら、その人間のアイデンティティの喪失を表している。ギレアドという国家には社会制度上の欠陥があり、人間に複数の名前があり、その制度のなかで、特に「名前(本名)」の喪失こそが、社会のなかで女性たちの不信感を高める結果へとつながっている。例えば、侍女たちは相手の本名を知るまで、相手を信用することはできない。信用できない人物に囲まれている環境下では、自らの意思に基づく自由な行動は取れない。だが、この点は、人や社会に思わぬ結果をもたらす。一部の侍女たちは、「名前(肩書)」から解放され「名前(本名)」に基づく自分らしさを取り戻すことによって、新たな価値を見出している。例えばジューンのように、同じ境遇の過去の女性との絆を感じ、生きるための糧とする女性がいる。さらには、モイラのように、ギレアドの自分とギレアドから脱した本来の自分を分けて考え行動する女性がいる。自身の「名前(呼称)」を変えることで、そのアイデンティティを変えてあるべき自分を表現したのである。

「名前(本名)」を奪われ、アイデンティティを喪失した侍女たちは、抑圧されたギレアド社会において、規律を遵守して生き続けるために必死にあがいていた。女性たちは、名前が持つ潜在的な力に気づき、その力を最大限に高めている。

一部の侍女たちは子供を産み、その子に名前を考え（産みの）母親がつけた名前ですぐに育てるといった行為を通じ、自身と生まれた子供との間に見えない繋がりを強めていったのである。

結語

『ハンドメイドズ・テイル／侍女の物語』は、抑圧的な社会の中で「生きる」と「生き抜く」ことの差異を対照的に描いた作品である。本映像ドラマでは、「生きる」とは、外的環境に依存した生命活動そのものを指し、ギレアドという社会に順応し、与えられた役割をこなすだけの存在であることを意味している。それに対し、「生き抜く」とは、その抑圧の中で必死にあがきながらも、自分自身を見出す行為であり、自由やアイデンティティを取り戻す過程を含んでいる。本ドラマの侍女たちは、「名前（肩書）」の下で生きる苦悩を経験しつつ、最終的に「名前（本名）」を手にする事で、自分自身を取り戻し、「生き抜く」道を模索していく。

例えば、ジャニーンやジューンは子供に名前を付けることで、侍女である自らの存在と侍女の立場で産んだ子どもとの絆を再構築する。この行為は、女性が自身のアイデンティティを強め、抑圧的な社会の中で未来への希望を見出す営みである。そして、モイラのエピソードも重要である。モイラは、ギレアドの抑圧を逃れた後も、その記憶と向き合いながら、モイラ自身のアイデンティティを再構築していく。モイラは、ギレアドでの自分と外の世界での自分の差異を認識することで、新しい生き方を開拓した。このようにモイラは、未来へ向け新たな道を切り拓く姿を見せている。

この作品は、ギレアドにおいて「生きる」という受動的な行為と、「生き抜く」という主体的な行為を描くことで、抑圧された社会構造や不平等への洞察を提示している。名前を奪われた侍女たちが、アイデンティティを再構築する中で本来の自分を取り戻していく姿は、普遍的な人間の強さや希望を象徴している。そうした視点からは、逆境の中で自己を問い直し、「生き抜く力」を発見する物語として本作品を読み解くことも可能である。特に、名前が自由やアイデンティティを象徴するものとして描かれている点は注目に値する。ジャニーンやジューンが子供に名前を付ける行為や、モイラが「ギレアド」での自分と「外の世界」での自分を区別する姿は、名前が単なる識別以上の意味を持つことを示している。この作品を、名前の持つ象徴性から女性の強さや希望を浮き彫りにする物語として捉え直すことも、有益であろう。こうした観点に立つと、本映像ドラマは、女性が抑圧を受けながらも自らの存在を問い直し、新たな未来を切り拓く可能性を示す作品と言える。ドラマ『ハンドメイドズ・テイル』は、視聴者に人生の本質的な価値

を問いかけ、女性の尊厳と希望を強調し、現代社会に対する警告を加えていると言えるのではないだろうか。

謝辞

本研究は、映像表象分野において、映像ドラマ（Streaming series）について論じ、情報技術者の視点から、情報リテラシーの統制がなされる社会での女性の人権について論じたものである。2024年度、広島工業大学情報学部情報コミュニケーション学科における、異分野横断型「専門ゼミナール A/B」の成果の一部である。市田が草稿を起し、住田が添削を行った。貴重な意見を頂いた本校の教員に感謝したい。

注

- [1] 『ハンドメイドズ・テイル／侍女の物語』は動画配信サイト Hulu にてオリジナル・ドラマとして配信された。2025年10月ファイナル・シーズン（6シーズン）が完結した。本ドラマ作品は、ネット配信のオリジナル・ドラマにおいて初めてエミー賞作品賞を受賞した。エリザベス・モス主演『ハンドメイドズ・テイル／侍女の物語』HJ Holdings、2017年、配信元 Hulu。本研究は、Hulu ドラマによる。以下、括弧（ ）内にドラマのシーズンとエピソード番号を記す。
- [2] マーガレット・アトウッド『侍女の物語』、斎藤英治訳、早川書房、2001年。Margaret Atwood, *The Handmaid's Tale*, Knopf Doubleday, 1998。本稿では、「Gilead」という言葉は配信ドラマ『ハンドメイドズ・テイル／侍女の物語』の訳語に従って、「ギレアド」と表記する。
- [3] 鴻巣友季子「NHK100分 de 名著 アトウッド『侍女の物語』『誓願』」、NHK 出版、2025年、pp. 5-6。
- [4] 稲垣貴俊「『ハンドメイドズ・テイル／侍女の物語』シーズン1—贅沢で素朴な恋愛劇、そして〈反乱〉の人間ドラマ」THE RIVER 編集部、2018年2月27日、2025年3月9日。
<<https://theriver.jp/handmaids-tale-review/>>。
- [5] 日中鎮朗「『侍女の物語』における言説のナラトロジーとストラテジー—論理と語りの揺らぎ」、日本英語文化学会、『異文化の諸相』2017年、pp. 5-19。
- [6] エリザベス・モスは、本ドラマ作品で、2018年に2度目のゴールデングローブ賞最優秀女優賞（TV部門）に輝いた。「エリザベス・モス：プロフィール・

作品情報・最新ニュース」、映画.com、2025年4月3日。〈<https://eiga.com/person/20999/>〉。

[7] 'Handmaid', *The Oxford English Dictionary*, London: Oxford UP, 1933. rpt.1961.

[8] 『広辞苑』第七版、第一刷、岩波書店、2018年。

[9] 「『侍女』と『メイド』の違いとは？意味や違いを分かりやすく解釈」、『違い比較辞典』(online)、2025年10月3日。
〈<https://chigai-hikaku.com/?p=58499>〉。

[10] Jen Atkins, "The New Normal: Activist Handmaids and Cosplay Choreographies in Trump's America", in 'Issue Donald Trump: The Presidency and the Media', *European Journal of American Culture*, vol. 41. 2, (2022) : p.188 [187-208]. 本文における記事の和文翻訳は筆者による。

[11] 前掲注。p.194には、アダム・フェイゲン (Adam Fagen) が撮影した、女性たちの写真が掲載されている。写真「侍女たちがPlanned Parenthood (略称:PP) と共に立ち上がる ('handmaids stand with PP')」(2017年6月27日撮影)では、抗議活動の様子を知ることができる。Planned Parenthoodとは生殖保健を世界的に提供することを目的として活動を行っている、アメリカの非営利団体の事である。活動家たちは「オバマケア (医療保険制度改革) 廃案・代替法案」(通称「トランプケア」)に反対するため、米国議会議事堂前で行った抗議活動を行った。

[12] 前掲注10の資料を参照されたい:p.196の図3、図4。これらは女性たちの写真である。2021年5月29日にテキサス州オースティンで開催された抗議活動での写真である。一部の女性参加者は赤いワンピースと白いボンネットを着用し、ドラマ『ハンドメイドズ・テイル』に登場する祈りの言葉「Under His Eye (神の御目で)」が書かれたプラカードを掲げた。一連の抗議活動は、ドラマの象徴性を借用することで、女性の身体的自由や中絶権に対する政治的介入への批判を訴えている。

[13] Facebookのイベント・ページは、アプリユーザーが企画したイベントをFacebook上で公開し、参加者を募るための機能である。ユーザーは本機能を利用することで、イベントの詳細情報(日時、場所、目的、主催者情報など)を掲載し、広く告知するこ

とが可能となる。閲覧者はサイトにアクセスすることで、企画内容の確認や参加の意思表示、申し込みを行うことができる。

[14] 中谷直登「解説『ハンドメイドズ・テイル/侍女の物語』完全没入ガイド-ダークな世界を『生き抜く』希望-傑作ドラマをかみしめる」THE RIVER編集部、2018年2月28日、2025年4月10日。〈<https://theriver.jp/handmaids-tale-guide/>〉。

[15] 前掲注4。

[16] 「コロニー」とは、ギレアドの思想に対して反抗的な行動を取った人物が収容される強制労働施設のことを指す。ドラマでは、コロニーの詳細について描かれている。(シーズン2エピソード4「不完全女性」)。コロニーでは、防護服なしで有毒物質の掘削を行う。看守による監視があり、労働中は作業を休むと鞭と電気ショックによる体罰がある。罪人は、大きなテントで共同生活を行うが、その人たちが使用する生活用水は汚染されている。そのため、罪人は皮膚病や脱毛、下痢、歯が抜け落ちるなどの症状に悩まされ、やがては死に至る。

[17] 「創世記」30章1-6節。「創世記」『聖書新共同訳-旧約聖書続編つき』共同訳聖書実行委員会訳、日本聖書協会、1997。

[18] フランク・B・ギブニー監修「名前」『ブリタニカ国際大百科事典』ティビーエス・ブリタニカ、1996年12月1日、pp. 804-05。

[19] 「代母」とは、生まれた子供に、キリスト教洗礼を受けさせる際、両親以外で子供の身元を引き受ける人物のことである。代母は子供が信仰をもって成長できるよう、導く役割を担う。モイラは、ジューンの子供「ハンナ」の代母になっている。このことは、ジューンとモイラの強い絆を象徴するものである。

[20] 武田悠一『読むことの可能性-文学理論への招待』彩流社、2017年、pp. 118-20。

[21] フェルディナンド・ソシュール『一般言語学講義』小林英夫訳、岩波書店、1917年、pp. 160-65。

[22] 前掲書、p. 163。